

『必携英語表現集 Essential English Expressions』 の出版にあたって

竹岡 広信

1. 『必携英語表現集』という名前へのこだわり

平成19年に出版しました、拙著『入試必携 英文 Write to the Point』(数研出版)では、「～が少ない」「～しないように」などの、英文を作る際の骨格となる表現をまとめました。「高校を卒業しても、携えたい本になるように」という願いで「必携」という名前を冠しました。

今回の『必携英語表現集』は、そういった「骨格」に「幅広い表現力」をプラスするための本です。やはり、受験の枠にとどまらない本を目ざし、「必携」という名前をつけました。さらに、「英語表現集」という名前はユニークだと自負しています。これは、従来よくある「熟語集」とか「単語集」といった枠組みとは一線を画し、そうした範ちゅうには収まらない本であることを示しています。「英語で発信するために必要な表現を掲載した本」という意味で、このような名前をつけました。

たとえば、次の日本語を生徒に英語で書かせてみると、驚くほどできません。

1. 机の下にもぐる
2. 2つの花を左右逆^に置く

日常生活ではよく聞く表現でも、なかなか難しいですね。答えは、それぞれ get under a table, put these two flowers the other way round(それぞれ『必携英語表現集』p.108 76と p.98 33を参照)です。このように、重要だがいわゆる「熟語」でないため、従来の「熟語集」には掲載されていない表現も積極的に取り入れました。

単語レベルでも同じことが言えます。たとえば、exchangeを「交換する」とだけ覚えていても、実際には使えません。「意見を交換する」の「交換する」なのか、「電球を交換する」の「交換する」なのかがわかりません。以下が本書のreplaceとexchangeの解説です。

replace : 「だめになった物を新しい物に交換する」という意味です。A replace B。「AがBに取って代わる」という形でも使いますが(例 CDs have replaced records「CDがレコードに取って代わった」)、設問文のように、(人)replace A with B「(人)がAをBと取り替える」という形でも使えます。

exchange : 「意見の交換」のように「(同種の物)を交換する」場合に使います。また、exchangeはexchange A for B「AをBと交換する」の形でも使います。(例 exchange yen for dollars「円をドルに交換(両替)する」)アメリカ英語ではexchangeの代わりにtradeも使います。(『必携英語表現集』p.120 118 119)

2. 何のための語彙か?

語彙を増強するには、その目的を明確にする必要があります。つまり、「能動的な語彙」なのか「受動的な語彙」なのかということです。『必携英語表現集』を執筆するにあたって、まずこのことを念頭に置きました。

たとえば、日本語で「薔薇」「麒麟」を読むことはできても、書ける人は少ないのではないのでしょうか。理由は「その必要がないから」です。もちろん、漢字検定を受験する人や国語の教員を目ざす人なら、このような漢字でも書ける必要があるかもしれませんが、しかし、普通はその必要はありません。これと同じことが英語にも当てはまります。

同じ「後悔する」でもregretは「能動的な語彙」ですが、repentは「受動的な語彙」といえるでしょう。「悪化する/させる」ならget worseは「能動的な語彙」ですが、deteriorateは「受動的な語彙」、exacerbateは受験生のレベルでは「受動的な語彙」にも入らないかもしれません。「尊敬する」はrespect

も look up to も「能動的語彙」です。だからといって、本書では look up to = respect のような形では提示せず、それぞれを「どのように使うのか」に重点を置き解説をしました。respect は、目的語に「物」も置くことができ、その場合には「～を尊重する」の意味になります。ところが、look up to は、目的語に「人」しかとらず、頻度もずいぶん下がります。よって、本書では、見出し語から look up to は外し、look down on の解説の一部に記述するにとどめました(『必携英語表現集』 p.254 ㉔)。

accept を「能動的語彙」にするためには、「受け入れる」という日本語だけ覚えていても不十分です。多くの生徒の間違ひは、日本語で考えて組み合わせてしまうことです。たとえば、「ゲーム世代の親はゲームを受け入れる」という文でも、accept を平気で使ってしまう。もし accept を「能動的語彙」にしたければ、よく使う目的語 one's invitation, one's suggestion, one's offer, money, a gift, an unfavorable situation を覚えておかなければなりません。

express 「～を表現する」も「能動的語彙」なので、目的語といっしょに覚えなければなりません。まずは oneself, さらに one's feeling(s), one's idea(s), one's thanks. what S think や how S feel も大切です。「意見を言う」と言うため、say one's opinion(s) と書いてしまう人が多いですが、正しくは express one's opinion(s) です(『必携英語表現集』 p.235 ㉕)。

3. 「使える形」での提示

たとえば、over coffee 「コーヒーを飲みながら」の項目では、次のように記述しています。

「身を乗り出して(コーヒーを覆うように)話をしている」感じです。over に「食べながら、飲みながら」という意味があるのではなく、over coffee の直訳「コーヒーを覆って」が「コーヒーを飲みながら」に発展しました。なお、人が複数でも a cup of coffee で構いません。この表現は普通「話をする」という動詞と共に使われ、たとえば「コーヒーを飲みながらテレビを見る」といった場合には使いません。

(『必携英語表現集』 p.180 ㉒)

いくら over ～ 「～を飲みながら」と覚えても、どのような場面で使うのかわからなければ、英作文や会話では役に立ちません。ですから、とにかく紙面が許す限り、「いつ、どのように使うのか」を解説しました。

また、give up 「～をあきらめる」と暗記するのも危険です。日本語の「あきらめる」は、途中で断念する場合と、計画段階であきらめる場合の2つがありますが、give up (V)ing は前者でしか使えません。よって、本書では、give up the idea of (V)ing という項目を作り、その中で give up も説明をしています。

日本語で「あきらめる」ことを「お手上げ」と言いますが、give up も同じ感じです。ただし、give up (V)ing の場合は「(やってきたこと)を(途中で)あきらめる、断念する」という場合のみ使い、「(将来)Vすることをあきらめる」場合は使えないので注意しましょう。

(『必携英語表現集』 p.192 ㉑)

動名詞をとる動詞を、その頭文字を取って MEGA FEPS と教えることは、むだではありませんが、それだけでは、4者択一式の文法問題には使えても、英作文には不十分です。

次の文を英語にきなさい。

若いころは彼の小説に没頭していました。

この答えに When I was young, I was absorbed in his novels. と書く人が非常に多い。これは、そうした生徒が、be absorbed in ～ 「一時的に～に熱中している」の「一時的に」を飛ばして、「～に没頭する、熱中している」と覚えているためだと思われる。be absorbed in ～は、「さっき彼の部屋をのぞいたら、ゲームに夢中になっていたよ」というような、「一時的な没頭」の意味でしか使えません。なお、先ほどの英作文の答えは、たとえば When I was young, I was into [often read] his novels. などとなります。

以下は同じく「～に夢中である」と訳す be (really) into ～の解説です。

口語的な表現で、日本語では「はまっている」にあたります。be absorbed in ～ 「～に夢中だ」は

「一時的な熱中」ですが、be into ～は通例「一定期間続く状態」に使います。なお、「～にはまる、夢中になる(動作)」は get into ～です。

(『必携英語表現集』 p.193 ㉔)

また、「彼は昔の彼とは違う」という場合、従来の問題集や参考書では、He has changed a lot.= He is different from what he used to be. のような記述がなされていましたが、両者は使われる場面が異なります。以下が本書での what S+used to be の解説です。

ここでの what は関係代名詞で、what S be は「(be の時制が表す時の)S の姿、性質」を意味します。what he is なら「今の彼(の姿)」, what our town should be なら「我々の町のあるべき姿」です。なお、設問文の S is not what S used to be. は「S の姿、性質」が悪化していることを示唆し、単に「昔から変化した」と言う場合には、S have changed. と表現します。

(『必携英語表現集』 p.102 ㉕)

以上のように、「能動的語彙」として習得してほしい表現は、とにかく説明を詳しくしました。

4. 基本事項も必要なら掲載

英作文を宿題としてやらせ、採点していると思うことは、レベルの高いクラスでも、基本が徹底されていない、ということです。たとえば、次の問題を見てください。

次の文を英語にきなさい。

1. 私はよくがんこ者と言われます。
2. サンタクロースを信じている人は多い。
3. 山へハイキングに行く
4. 子どもを産む

1 の答えとして、I am often said that I am stubborn. (正しくは、I am often told that I am stubborn.)と書いてしまう生徒は少なくありません。このような、say と tell の使い方の違いは、学年を問わず、本当に多いと思います。stubborn という難しい単語を使っている生徒が、say や tell のレベルで間違っているというのは、滑稽ですが、現実です。

2 の答えとして、A lot of people believe Santa Claus. (正しくは、A lot of people believe in Santa Claus.)とする間違い答案もよく見ます。

3 の答えは go hiking in the mountains ですが、これは in the mountains という熟語を知らないとどうしようもありません。非常に簡単な熟語かもしれませんが、掲載されている本は意外とないように感じています。

4 の答えは have a baby です。堅い表現なら give birth (to a child) となります。

こうした本来なら中学校段階で習得しておくべき基本事項も、本書には掲載することにしました(それぞれ『必携英語表現集』 p.193 ㉔, p.118 ㉑, p.191 ㉓, p.92 ㉒を参照)。

5. やや難しい熟語・語彙も掲載

高校生の段階では能動的語彙として習得するのがやや難しいものでも、読解でよく見る熟語・語彙(=いづれ使えるようになってほしい語句)は掲載しました。難易度は、使用頻度を考慮して、「基本」「標準」「やや難」「難」の4つに分類しました。そのような語句は主に「やや難」か「難」に分類されているので、どの表現が難しいかはひと目でわかります。

また、このような(やや)難しい表現は、できる限りその成り立ちから説明して、丸暗記にならないように工夫しました。たとえば、by virtue of ～「～によって、～の結果として」の説明は以下のとおりです。

virtue「美德、長所」のもとの意味は「男らしさ」で、「強さ」→「美德、長所」に意味が発展しました。by virtue of ～は virtue のもとの意味の「強さ、力」からできた表現で、「～(の力(virtue))によって(by)」という意味です。by means of ～「～によって」や as a result of ～「～の結果として」の堅い表現です。

(『必携英語表現集』 p.283 ㉗)

このように、ときには語源にまでさかのぼり、その意味の成り立ちを説明しました。

昔、ある熱心な生徒に「先生、どうして without fail なんですか？ without failure が正しいと思うのですが？」と尋ねられ、答えられませんでした。

しばらく時間をもらって調べたところ、次のことがわかりました。fail はラテン語 fallere から 13 世紀にできた単語で、当時は名詞も動詞も同形でした。

そして、その当時、すでに without fail という熟語は存在していました。新しい名詞形の failure が登場するのは 17 世紀中頃です。その後、fail の名詞形は fail ではなく failure が使われ始めましたが、熟語のほうは昔の形をとどめたわけです(『必携英語表現集』p.272 [コラム⑧] 昔のなごりがある熟語)。

これを彼に伝えたところ、熟語にとっても興味を示し、その後ずいぶんと努力した末、京都大学の英語の模擬試験で全国 1 位にまでなりました。勉強で何より大切なのは、「楽しい」「面白い」という気持ちです。生徒に丸暗記を強要するのではなく、熟語の成り立ちのような、ほんのちょっとしたことでも、丁寧に教えることによって、生徒の知的好奇心を刺激できることもあるわけです。

6. 本書のテストについて

本書の設問文となっている英文は、「英作文」を念頭において 1 文 1 文作成し、イギリス人とオーストラリア人の先生にチェックしていただいた英文です。よって、そのまま英作文問題集として使用してもいいような仕上がりだと自負しています。そのため、生徒に対して実施するテストは、最終的には日本語を見せて、「英語に訳しなさい」でも構わないわけです。ところが、それだと特に初級者には負担が大きすぎるので、本書の形をそのまま採用して、空所を 1 つだけ設けた形の試験にしていきたいと思います。そうすることで、「サクサクできる」という感じを生徒にもたせることができます。特に高校 1 年生や英語が苦手な生徒には、「私にもできる!」と生徒に思わせ、高得点をとる癖をつけさせることが大切です。最初に高得点を取った場合、「それを続けていこう」と思う生徒が多いですが、最初が悪いと、早々とあきらめてしまう生徒も少なからずいるからです。そうしたことを考慮して、問題文の空所は 1 つになっています。

本書を 3 回ぐらい終えた段階で、次第に空所の数を増やしていけばいいでしょう。ただしその場合、複数の答えが出てくる可能性が高くなるので、最初の 1 文字を指定するなどの措置が必要となる場合があります。たとえば、through trial and error を

() () and error とすると by trial and error も正解になってしまうので、最初のカッコを (t-) としなければなりません。

また、生徒には極力音声聞くように指導していただきたいと思います。音声はダウンロードできるようになっていますから、生徒にはスマートフォン等にダウンロードしてもらって、「音から入れたほうが頭に残るよ」と口を酸っぱくして指導していただければ幸いです。

7. 一貫性について

教員の方は、常に生徒に一貫した矛盾のない教え方をする必要があります。高校 1 年生で行っていた授業内容と高校 3 年生で行う授業内容が矛盾しているようでは、生徒が混乱してしまいます。そのことを念頭において、授業の組み立て、教科書、問題集、参考書等の選択をしなければなりません。

20 代のころ、私は look down on = despise, disdain, scorn というような、イコールで結ぶ授業が好きでした。グルーピングしたほうが、語彙の増強には役に立つという思いがあったからです。「耐える」シリーズ(stand, bear, tolerate, endure, put up with)などのシリーズを多数作成し、生徒に覚えさせました。その一方で、当時の私は、英作文をどう教えればよいのかわからない状況でした。今から考えれば、「能動的語彙」という発想が希薄だったために、そのようなグルーピングを用いた教え方をしても、まったく気にならなかったのだと思います。look down on = despise と教えていたということは、それぞれの単語あるいは熟語を「受動的語彙」として指導していたわけで、「能動的語彙」=「使える形」では教えられていなかったということです。もし、それぞれの使い方に精通していたら、そのような授業はしなかったと思います。

皆さんが竹岡と同じ轍を踏むことなく、「新しい英語教育」に立ち向かっていかれることを願っております。

(駿台予備学校講師, 洛南高等学校講師, 竹岡塾主宰)